様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　　5 月　24　日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：　2009～2011
課題番号：21520391
研究課題名（和文）文法と言語外情報との接点をさぐる

研究課題名（英文）　Study on the Interface between Grammatical Knowledge and Extralinguistic Information.

研究代表者
奥　聡（OKU SATOSHI）
北海道大学大学院・メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：70224144

研究成果の概要(和文)：日本語における目的語の省略と語順変位における情報構造上の制約を、より深い文法原理から導き出す可能性を追求し、一定の成果を上げることができた。また、本研究を進めてゆく中で、ゼロ主語の特性を正確に明らかにする必要性（特に、ゼロ主語が「総称的（generic or quasi-universal)」あるいは「存在的(quasi-existential)」に解釈される現象を最新の理論的枠組みで分析してゆくことの必要性）が明らかになり、現在の研究課題へと発展してきている。

研究成果の概要(英文)：The current study has shown that “functional accounts” on Japanese null objects and scrambling can be derived from deeper grammatical principles and the interaction with extralinguistic knowledge. It has also developed itself into the next important research topic about quantificational use of zero pronouns from the East Asian perspective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：統語論、統語と意味のインターフェイス、スクランブリング、ゼロ項、情報構造

１．研究開始当初の背景

研究開始当初は、以下の３つの点が本研究を進める上での重要な状況であった。(1)機能主義的原理による日本語の語順と省略の研究（Kuno 1995, 神尾・高見 1998 など）が一定の成果を挙げていた。(2)極小主義研究により、言語外の情報と文法との関係に関する研究が進み始めていた。(3) Reinhart (2006)など文法と言語外情報とを結び付ける具体的な研究が進み始めていたが、日本語をデータとした研究からの貢献がまたほとんど見られていなかった。

２．研究の目的

研究の目的は２つ：①上記１（１）で得られていた、記述的ない一般化と機能論的な説明を、(2)(3)の方法論からより原理的に説明すること、および②日本語のデータから、文法と

言語外情報との接点の研究の方法論に対して、有益な貢献を行うこと、であった。

３．研究の方法

文献調査と、母語話者の言語直感を用いたデータにもとづく、理論構築型の研究であり、これまでの当該現象およびそれに対する理論的説明を扱った論文を精査し、より深い説明方法を仮説として提案。テスト文を用いて文法判断タスク（grammatical judgment task）を言語資料提供者に対して行うことにより、仮説を検証。理論の精緻化をめざす、という方法をとる。また、学会・研究会での発表、及び専門家との面談・ディスカッションにより、情報を収集し・フィードバックを得ながら仮説を検証してゆく。

４．研究成果

研究成果は、大きく分けて、（１）研究計画に沿って行われた、日本語におけるゼロ項、スクランブリング、情報構造および一般認知能力との関係をめぐるものと、（２）上記研究を進めていく中で浮かび上がってきたあらたな研究課題（主に研究の後半の８ヶ月程度）からなる。それらを以下、順次簡潔に報告する。

(1)日本語における目的語の省略と語順変位（スクランブリング）における情報構造上の制約をより深い文法原理（Reinhart 2006）から導き出す可能性を追求（Oku 2012 として出版予定）することにより、研究開始以前は、「機能主義的」研究方法により独立に主張されてきた現象とその説明に対して、極小主義を中心とする「形式主義的」研究方法論からより原理的な説明を与えることができることを示すことに、日本語のデータを用いながら一定の成功を収めたと考える。
　具体的には、たとえば、

(a)「太郎は、ハムレットを、図書館で、読み、次郎は、φ 研究室で読んだ」
(b)「太郎は、ハムレットを、図書館で読み、次郎は、リア王を　φ読んだ」

(a)(b)において、(a)は自然である一方、(b)が不自然であるという観察(神尾・高見 1998、Kuno 1995 など）に対し、従来の機能主義的説明では、(i)日本語では動詞の直前の要素が最も情報の重要度が高い、(ii)上記(b)では、主語・目的語・付加語・動詞という有標の語順にしてあり、いわば意図的に、動詞の直前の付加語が重要な要素であることを示す構造である、(iii)それにもかかわらず、それを後続節で省略しているため、(b)が不自然になっている、説明されていた。しかし、この説明おいて、少なくとも次の点に関する原理的説明が十分とはいえなかった。

(c) 有標の語順・無標の語順を決める際のコストの問題をどのように考えるのか
(d) 有標の語順と無標の語順が表すことにできる意味解釈の比較はどのようなメカニズムで行われているのか

本研究では、(c)を統語的なスクランブリングによるとし、syntactic な操作にはコストがかかることを明確に仮定している。その上で、Reinhart (2006)で提案されている Reference-set computation（すなわち、同じ語彙項目からなり、構造がわずかに異なる文同士が表しうる可能意味の比較のメカニズム）の考え方を採用することにより、(d)に対しても明確な方法論を提案することができた。また同時に、「日本語では動詞の直前の要素が最も重要な情報を担う」という仮説に対して、構造上最も深く埋め込まれた要素が核ストレスを担うという、より一般的な原理から導かれるという Ishihara (2001)の提案を補完することもできた。
　さらに、2010 年の研究発表(Oku, 2012 として出版予定)では、主語を飛び越える目的語のスクランブリングにも、同じ説明が与えられることを示し((e)に比べて(f)は容認度が下がる)、分析の一般性を高めることに成功している。

(e)　土曜日は、数学を太郎が教える。日曜日は、次郎が教える。
(f)　土曜日は、数学を太郎が教える。日曜議は、英語を教える。

　また、上記のような表面的な語順の変位（スクランブリングによる）以外にも、いわゆる数量詞繰上げ現象でも、Reinhart (2006)が報告している現象が、日本語においても起こること、しがたって、同様の reference-set computation による説明が有効であることをしめした（日本語においてこの現象を愚弟的に指摘したのは、管見によれば、本研究がはじめてである)。

(g) TA が 1 人、どの CALL 教室にも鍵をかけた
(h) TA が 1 人、どの CALL 教室にも待機します

(g)においては、問題となる TA は 1 人しかいないという、表層の語順どおりの（もっともコストのかからない）解釈が普通であるのに対し、(h)では、それぞれの教室に別々の TA が待機するという解釈が普通である。後者の

解釈は、普遍数量詞のついた「どの CALL 教室にも」が解釈の時点で、文頭に移動しているという標準的な数量詞繰上げの分析を採用する。そして、(g)においてはそのような解釈が取りづらいこと、(h)においてはそのような解釈が最も自然であること、そして、数量詞繰上げは統語的にコストのかかる操作であること、を前提に、われわれ人間の世界に対する認識（この場合、(h)を語順どおりの形で解釈すると、1 人の TA が同時に複数の教室に存在するという、現実的には起こりえない解釈になってしまう）と、コストのかかる統語操作数量詞繰上げとが、相互作用をする場合があるということを、日本語の例からも示した。

これらの研究全体をまとめたものとして、奥(2010)が開拓社より出版された。

(2)上記の研究を推し進めてゆく中で、本研究期間の後半において、ゼロ主語の特性を正確に明らかにする必要性がでてきた（長谷川 2010、Abe 2009)。具体的には、日本語のゼロ主語が「総称的（generic or quasi-universal）」あるいは「存在的(quasi-existential)」に解釈される現象を最新の理論的枠組みで分析してゆくことの必要性が明らかになった。

(i) この駅では、新聞を売っている
(j) この村では、毎朝茶粥をたべる
(k) おや、庭に水をまいたらしいね

(j)における「表現されていない」意味上の主語（understood subject）は、「誰もが」という全称的数量詞と考えることができる。一方、(i)(k)における understood subject は「誰かが」という存在的数量詞と考えるのが最も自然であると思われる。これらは Cinque がイタリア語で分析したゼロ主語とも共通すると思われる。ただし、(l)は自然であるのに対して、(m)が不自然であることから、数量詞的意味を担うゼロ主語の認可にはより厳しい条件が課されると考えられる。

(l) この駅ではいつも誰かがそばを食べている
(m) この駅ではいつもそばを食べている
（「誰かが」という解釈は不自然）

一方で、ヨーロッパ言語を中心に、ゼロ主語を許す言語における、ゼロ主語総称用法の研究が、最新の極小主義的アプローチから積極的に研究されるようになってきている（Biberauer et al 2010 など)。このような中で、そのような研究成果を踏まえた言語との比較を行いながら、日本語のゼロ主語の「総称的」「存在的」用法の精緻な比較統語論的理論的分析が必要であることが明らかになった。ロマンス語の非人称構文を統語的に分析した藤田(2010)を review することにより、主語動詞「一致」言語における「総称的」用法の構文の特性を確認（奥 2011 として発表）した。また、今後の研究の端緒となる予備的研究を 2 本学会で発表（日本英文学会北海道支部語学部門シンポジアム「目に見えない要素をめぐって：統語素性と削除現象」、日本言語学会ワークショップ Noun Phrases in Japanese: Syntactic Dependencies and Interpretations）し、他の研究者との情報交換を行い、フィードバックを得た。

【参考文献】

・Biberauer, T. et al. (2010) *Parametric Variation: Null Subjects in Minimalist Theory*, Cambridge University Press.
・長谷川信子（2010)「CP 領域からの空主語の認可」長谷川（編)『統語論の新展開と日本語研究』31-65.（開拓社)
・Ishihara, Shin-ichiro (2001) “Stress, Focus and Scrambling in Japanese,” A Few from Building E39, MITWPL 39, 151-185.
・神尾昭雄・高見健一（1998)『談話と情報構造』(研究社出版)
・奥　聡（2010)「統語、情報構造、一般認知力」長谷川（編)『統語論の新展開と日本語研究』227-267.（開拓社)
・ Reinhart, Tanya (2006) *Interface Strategies*, MIT Press.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

(1) 奥　聡、再帰代名詞クリティックの諸相（書評：藤田健『ロマンス語再帰代名詞の研究：クリティックとしての統語的特性』(北海道大学出版会))(単著) 2011.『北海道言語文化研究』第9号, pp.93-114.　（査読有)

(2) Oku, Satoshi, Interface Economy – A Note on Markedness and Computation.（単著）(to appear) *Formal Approach to Japanese Linguistics 5*,（印刷中）(MITWPL)　（査読なし)

(3) Oku, Satoshi, Norbert Corver and Jairo Nunes (eds.) *The Copy Theory of*

Movement. John Benjamins, 2007. 388pp.（単著）2009. In *Studies in English Literature*, English Number 50, pp.235-242.（English Literary Society of Japan)）（査読有）(Review article)

(4) Oku, Satoshi, "Minimalism and Information Structure: A Case of Ellipsis in Japanese,"（単著）2009 *Proceedings of WAFL 5*, pp. 257-269, published and distributed by MITWPL.（査読有）

〔学会発表〕（計 4 件）

(1) Oku, Satoshi, "Arbitrary" Zero Pronouns Revisited（単著)2011 年 11 月 27 日日本言語学会第 143 回大会　Workshop – Noun Phrases in Japanese: Syntactic Dependencies and Interpretations における発表　（大阪大学）

(2)奥　聡「目に見えない要素をどのように動機付けるか」（単著）2011 年 10 月 2 日日本英文学会北海道支部第 56 回大会語学部門シンポジアム『目に見えない要素をめぐって：統語素性と削除現象』における発表（札幌学院大学）（発表及び司会）

(3) Oku, Satoshi, Interpretive Economy – A Note on Markedness and Computation（単著)2010 年 5 月 8 日 Formal Approach to Japanese Linguistics (FAJL) 5. UC Santa Cruz, 米国（国際学会）

(4)奥　聡「統語、情報構造、一般認知」（単著）2009 年 9 月 3 日（木）神田外語大学 CLS 言語学ワークショップ『日本語統語研究の新展開：命題を超えて』（招聘発表）

〔図書〕（計 1 件）

・奥　聡「統語、情報構造、一般認知」（単著)(2010)長谷川信子[編]『日本語研究と言語理論―命題を超えて－』（開拓社、東京）第 7 章 pp.227-267

６．研究組織

(1)研究代表者

奥　聡（OKU SATOSHI）

北海道大学・大学院・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：70224144

(2)研究分担者

なし　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

なし　（　　）

研究者番号：